戦国大名南部氏のすごろく遊び

布施 和洋
（南部町教育委員会社会教育課史跡対策室総括主査）

現在放送中のＮＨＫ大河ドラマ「光る君へ」は、吉高由里子演ずる紫式部と、柄本佑扮する藤原道長を核とした平安時代の宮廷ドラマである。物語の中では貴族や女官によって様々な遊びが行われていた様子が描かれている。

すごろく遊びも平安時代には既に広まっており、宮中の貴族たちが嗜んでいたと考えられている。

当時のすごろくは、古い形式の盤上ゲームであり、盤上に配置された双方１５個の駒をサイコロの目の数によって前に進め、先に全てゴールさせた方が勝者となる。

このすごろく遊びを北東北最大の戦国大名であった三戸南部氏も嗜んでいた証拠が、ついに本拠地・聖寿寺館跡（しょうじゅじたてあと）の昨年の調査で確認された。

聖寿寺館跡出土サイコロと駒（南部町教育委員会提供）

発掘調査で出土したのは１辺１２㎜の正六面体の小さなサイコロで、各面に１～６までの数を表す目が刻まれていた。現代のサイコロと同様に対面の和は７になる。分析の結果、サイコロは鹿角製と推定されている。

すごろくの駒は直径１８㎜、厚さ４㎜の動物骨製で、中央に６つの点が施されており、過去の調査で東北最大規模の大型中心建物跡の真下から２枚出土していた。

すごろく遊びを示すサイコロと駒がセットで出土するのは、東北地方では初となり、どちらも共伴する中世陶磁器から１５世紀後半から１６世紀前半の年代が想定される。

サイコロは奈良時代に中国から日本へ伝来し、宮廷などで貴族の遊興として、すごろく遊びが行われるようになったと考えられている。

平安時代中期に紫式部が執筆した『源氏物語』第二十六帖「常夏（とこなつ）」には、「双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、「小賽（しょうさい）、小賽」と祈ふ声ぞ、いと舌疾きや」と記述され、当時の人々がすごろくに熱中する場面が描かれている。

さらに、鎌倉時代成立の『平家物語』には、平安時代の院政期の白河法皇が「賀茂河の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの（都の賀茂河の水の流れとサイコロの目と比叡山延暦寺の僧兵は私の思い通りにならぬ）」と述べたと記載されている。

室町・戦国期になると、すごろく遊びは地方の守護所や武家居館にも広まり、越前国の戦国大名・朝倉氏の一乗谷遺跡からは、サイコロと駒がセットで出土している。

聖寿寺館とほぼ同時期に描かれた１６世紀の厩図屏風（東京国立博物館蔵）には、自慢の名馬が繋がれた観覧用の厩で、名馬を横目にすごろくや将棋、囲碁が執り行われている様子が描かれており、天下の名馬を多数携えていた南部氏も、このような状況ですごろく遊びに興じていた可能性が考えられる。

本県近隣では、岩手県二戸市の四戸城跡から、サイコロが２個一対で出土しており、片方は特定の目が出にくくなっていることから、イカサマが横行していた可能性も想定される。

聖寿寺館内部では、これまで出土品や文献から囲碁や聞香、連歌など多彩な遊興が行われていたことが推定されていたが、今回、城館内部で、すごろく遊びも行われていたことが明らかとなり、謎に包まれた南部氏の居館内部での生活の様子を解明する手掛かりになると考えられる。